東海大学資格教育研究
第 2 号
DOI: 10.18995/24367664.2.91

〈書評〉

『サブカル国語教育学：「楽しく、力のつく」境界線上の教材と授業』

町田守弘 編著　三省堂，2021 年 9 月，302p.
ISBN 978-4-385-36502-2　本体 2,200 円＋税

本書は、いわゆる「サブカル」、例えばマンガ、アニメーション、映画、ドラマ、ゲーム、お笑い、SNS などといったようなものを国語科の授業教材として利用するに当たっての実践例を提案するものである。

はじめに、本書を吟味する前に、町田が述べているような、いわゆる「サブカル」の概況をごく簡単に整理しておきたい。サブカルチャーに関する経済調査はデジタルコンテンツ協会の「デジタルコンテンツ白書」、帝国データバンクの「『アニメ制作業界』動向調査」、全国出版協会・出版科学研究所の「出版指標年報」をはじめとして様々なものがあるが、例えば日本動画協会の「アニメ産業レポート 2021」によると、広義のアニメ市場は 2020 年に 2 兆 4261 億円規模に達しており、その内訳は①TV が 839 億円、②映画が 617 億円、③ビデオが 466 億円、④配信が 930 億円、⑤商品化が 5819 億円、⑥音楽が 276 億円、⑦海外が 12,394 億円、⑧遊興が 2630 億円、⑨ライブが 290 億円であるとされている（日本動画協会「アニメ産業レポート 2021 サマリー」https://aja.gr.jp/download/anime-industry-report-2021-summary_jp）。

アニメ市場だけを見ても莫大な需要があることがわかるが、テレビの枠を超えて、様々なメディアコンテンツへと派生しており、そちらの比重が非常に大きいことがわかる。現代はメディアミックスやクロスメディアが数多く生み出される時代であり、「サブカル」が児童生徒等の関心を引くことはもとより、こうした多様化するメディアの存在を授業内でも積極的に取り扱うべき時期が既に到来していると言えるかもしれない。

それを示唆するかのように、各教科等の教科用図書でも、「サブカル」に関連するテーマが教材として取り上げられるようになってきている。例えば、現行の東京書籍の小学校国語科教科用図書『新しい国語 5』や三省堂の中学校英語科教科用図書『CROWN English Expression II New Edition』には手塚治虫の伝記が取り上げられているほか、三省堂の高等学校国語科教科用図書『文学国語』において、吾峠呼世晴『鬼滅の刃』やYOASOBI（ヨアソビ）の「夜に駆ける」が掲載されたことが話題を呼んでいる（朝日新聞デジタル「YOASOBI、トニトニ、ヒゲダン…新高校教科書に人気曲が初登場」https://www.asahi.com/articles/ASQ3Y3TFDQ3RUTIL04L.html）。

町田も同様の見解を示しており、1998 年版以降の中学校学習指導要領「美術」で「漫画」が取り上げられていることや国語科の教科用図書でも教材として取り上げられていることを述べつつ、「マンガが学校の文化と親和性に乏しいものである一方で、マンガと教育とをつなぐ制度があるのもまた事実」（本書 16 頁）と総括している。

もちろん、学校教員の多くは、いわゆる「サブカル」の各種媒体に対して、多くの子どもたちが強い関心を持っていることを体感的に理解はしていようが、難しいのは教材としての活用方法についてであろう。実際、本書の副題には、「境界線上の教材と授業」とあるが、これを町田は前述したような「サブカルチャー教材」は、「教材となるかならないかの『境界線上』に存在していて、扱い方によっては教材として成立するけれども、扱い方次第で教材としては成立しない、という意味で用いた」（本書 13 頁）と述べている。言い換えれば、「サブカル」を教材として用いる場合の難しさの 1 つは、児童生徒等の学習にどのように結びつけるのか、という点にあり、その処方箋が本書というわけである。

表１　本書の目次

はじめに

総論
町田守弘「『境界線上の教材』による授業改革 ―『楽しく、力のつく』教材開発と授業開発のために―」

第１章　「マンガ・絵本・写真」を使った授業提案
岸圭介「のび太といっしょに問題解決学習」（『ドラえもん』第28巻）
小西理恵「4コマ漫画の音読で育む語彙力・言語表現力」（オリジナル4コマ漫画）
内田剛「マンガの名ゼリフ、キャラクターになりきって表現しよう」（『マンガ「名ゼリフ」大全』）
加瀬幸志朗「マンガを比較して「語り」を読み解こう」（『コミック 文体練習』）
神田恵美子「4コマ漫画の展開を考えよう」（『火星人と土星人』）
宮﨑春菜「反転ワードハンティング」（『大家さんと僕』）
山田範子「ストーリーマンガの表現の工夫を読み解こう」（『かぐや様は告らせたい～天才たちの恋愛頭脳戦～』第10巻）
金子泰子「マンガをノベライズ（小説化）してみよう」（『鬼滅の刃１　残酷』）
光野公司郎「4コマ漫画にツッコミを入れて哲学しよう」（『4コマ哲学教室』
甲斐伊織「ことわざから見る日常の風景―現代版ことわざの創作―」（『ことわざ絵本』）
李軍「『サンタクロース』で育む批判的思考力」（『サンタのおばさん』）
王培「『私の夢の国』を紹介しよう」（オリジナル写真）
吉川七菜子「短歌と写真を組み合わせる―「うたらば」創作委員会―」（「うたらば」）

第２章　「映像」を使った授業提案
小見紗永子「エリンの世界を情景描写から読み取ろう」（『獣の奏者エリン』）
小峰梓「『スーパー戦隊シリーズ』を企画しよう」（「スーパー戦隊シリーズ」）
石井明子「『耳すま』の映像と字幕から鍛える日本語の力」（「耳をすませば」）
後藤厚「映像の表現効果を『読む』」（「父と暮せば」）
深澤克俊「星新一のショートショートを『見て』『読んで』味わおう」（「生活維持省」）
市川涼「ジャミラの変身を読み取る」（「ウルトラマン」第23話「故郷は地球」）
江口千晶「ミュージカルの楽曲の歌詞を創作しよう」（「宝塚グランドロマン『新源氏物語』」）
岡田和樹「『グッド・バイ』に終焉を」（「グッド・バイ」）
加藤晴奈「比べることで考える―単元『詩歌の世界』」（「言の葉の庭」/『小説 言の葉の庭』/「Rain」）
金田富起子「「かぐや姫の物語」と『竹取物語』の比較読み」（「かぐや姫の物語」／「天の羽衣」（『竹取物語』））
小林賢太郎「『13人目の陪審員』として、議論を小説化してみよう」（「12人の優しい日本人」）
中川甲斐「アニメーションを“読み”、“刺さる”CM をつくろう」（「秒速5センチメートル」／「One more time, One more chance」）
柳本彩子「身体表現を言語化しよう―戯曲と舞台のはざまで」（『朝日のような夕日をつれて21世紀版』）
園部泉子「映画を用いてメディア・リテラシー力をつけよう」（「下街ろまん」）

第３章　「音楽」を使った授業提案
荒木智「『車輪の唄』の歌詞を読む」（「車輪の唄」）
坂本晃洸「ミュージックビデオを読み解く」（「結証」）
齊藤真子「『マリーゴールド』で詠む相聞歌（「マリーゴールド」）
坂本邦仁「『パプリカ』をいろいろな視点で読み解こう」（「パプリカ」）
中桐由「和歌とJ-POP の交差を求めて」（「糸」「狼になりたい」）
平沼一翔「楽曲から学ぶ物語の重層性」（「ピアノ泥棒」）
大谷誓也「現代と重なる『レモン』のイメージ」（「Lemon」）
櫻井礼子「J-POP からショートストーリーを作ろう」（「ライオン（2018 New Ver.）」）
田中慎一朗「歌詞の精読で文学テクストの「読み」をつくる」（「太陽」）
永瀬恵子「現実と虚構の合間で手紙をしたためよう」（「桜の季節」）

第４章　「その他（ソーシャルメディア・ゲーム・お笑いなど）」を使った授業提案
金巻秀樹「YouTuberに学ぶプレゼンテーション能力」（YouTubeチャンネル「中田敦彦のYouTube大学」）
遠山大樹「『YouTube』動画をモデルに、録画動画で表現してみよう」（動画共有サイトYouTube）
森響平「映画レビューを活用した『読むこと』の授業」（動画配信サービス・映画レビューサイト）
大森麻美「『どうぶつの森』でプレゼンテーション」（Nintendo Switch「あつまれ　どうぶつの森」）
橘美咲「J-POP かるた『狩歌』で詩を創作しよう」（J-POP かるた「狩歌」）
八木翔平　「漫才（分析）入門編！」（かまいたち「UFJ・USJ 漫才」）

おわりに

本書の目次は、表1に記載の通りとなっている。章構成を見てみると、理論的な枠組みを明らかとした「総論」に始まり、第1章では「マンガ・絵本・写真」を、第2章では「映像」を、第3章では「音楽」を、第4章では「その他（ソーシャルメディア・ゲーム・お笑いなど）」を使った授業提案が続いている。近年、マンガなどを教材として用いた授業提案は少しずつ増えてきているとはいえ、動画共有サイトの投稿動画やコンシューマーゲームまで教材として包括された授業提案が、これだけ数多く取り上げられている著作は、おそらく本書をおいて類例を見ないだろう。

それぞれの各セクションの体裁も全編にわたって統一されており、「教材名」、「校種」、「こんな力がつきます」、「1 教材提案」（1-1 素材の解説、1-2 教材としての魅力）、「2 授業提案」（2-1 授業のねらい、2-2 授業の展開、2-3 授業のポイント）、「「3 実践に向けて」、「町田先生のコメント」という構成になっている。いずれのセクションも見開き3頁に収められており、関心のある授業提案だけをピックアップして読むことも可能になっている。

校種には、小・中・高・大と書かれた進捗ゲージのようなものが表示されており、授業提案がおすすめする学校種が一目でわかるようになっている。なかには、高校生だけでなく、大学生以上も対象とした授業提案も含まれている。また、縮小したワークシートを収録しているものもあり、簡易的な学習指導案のように読むこともできる。

例えば、本書で1番最初に取り上げられているのは、『ドラえもん』を用いた授業提案である。この授業提案は単元目標に、①マンガのコマに描かれた絵や言葉を読む活動を通じて、根拠をもって、結末を予想することができる、②自分の考えた理由や根拠と友達の意見を比べることで、読解の観点を増やす、ということが設定されている。すなわち、授業概要を端的に記せば、学習者にマンガの途中までのコマを提示して、物語の伏線を読み取らせて、どのような結末になるかを予想させることで、論理的思考力の育成を目指す展開となっている。

『ドラえもん』は原作のマンガだけでなく、多くの地域でテレビアニメが放送されていて知名度が高く、そのほとんどが1話完結の短編作品で構成されており、ストーリーの流れもある程度は共通している。ほんの少ししか見たことがない人でも共通理解を得られやすい作品で、教材として使用しやすいと言える。もともと『ドラえもん』は学年誌で連載が始まったということもあり、担当の学年に応じた作品の選定がしやすいというのも大きなメリットだろう。

光村図書出版から発行されている小学校国語科の2年生用教科用図書では、「あったらいいな、こんなもの」という教材名でドラえもんのひみつ道具を考案して発表しあうという単元が用意されていたり、東京書籍の中学校国語科の教科用図書でも「根拠を挙げて考えを述べる」という単元では、ディスカッションのトピックとして「『ドラえもん』の主人公はドラえもんか、のび太か」というものが例示されていたりしている。岸の授業提案も教材となる作品の特性が非常によく活かされており、優れているように思われる。

さらに、本文中では言及されていないが、こうした授業提案は岸が自身の学校で行った実践経験に加えて、授業研究上の裏づけもなされているところは特筆すべきだろう（岸圭介「国語科教育におけるマンガ教材の選定・開発をめぐる探究：藤子・F・不二雄『ドラえもん』の意義と可能性」早稲田大学博士学位請求論文、2021年）。本当に短い頁の中ではあるが、授業実践のエッセンスが詰め込まれている。全ての授業提案がここまで深く研究されているわけではないのかもしれないが、「町田先生のコメント」という欄を各授業提案の最後に必ず設けることで、国語教育研究者からの視点を組み込もうとする姿勢も評価できる。

本書の「はじめに」で、町田は自身が担当する授業では「楽しく、力のつく」という目標を掲げてきたと述べている。そのため、本書の副題にも「楽しく、力のつく」というキーフレーズが冠されているが、同様に別書『実践国語科教育法：「楽しく、力のつく」授業の創造』（学文社、2019年。以下『実践国語科教育法』と記す）でも同じ言葉が使用されており、こちらは既に第3版まで版を重ねている。本書が「サブカル」教材をいかにして、授業教材として効果的に使用することができるかという、具体的な授業案を記した教材研究の実践書だとすると、『実践国語科教育法』は「国語科教育法」の理念から指導法までを体系的に学ぶための入門書となっている。国語科の教師を目指す初学者であれば、最初に『実践国語科教育法』で、発問・指示や板書・ノート指導・ワークシートの在り方を知り、学習指導案作成の基本を押さえてから、本書を読むと理解がより深まるだろう。

少し欲を言えば、過去の研究と本書での実践例が密

接に結び付いていることが、本書だけではわかりにくくなってしまっているので、実践と研究との橋渡しになるような記述があるとよかったかもしれない。例えば、先ほどの岸による授業提案も別な授業研究によって丁寧に裏づけられたものであることは述べた通りであるが、本書の参考文献からだけでは全貌が把握しにくい。そして、町田も理論的枠組みを本書の総論で概括しているが、その背景には町田が記した『国語科の教材・授業開発論：魅力ある言語活動のイノベーション』（東洋館出版、2009年）、『「サブカル×国語」で読解力をはぐくむ』（岩波書店、2015年）、『国語教育を楽しむ』（学文社、2020年）などの重厚な先行研究がある。特に『国語教育を楽しむ』では、大学院生を対象とする授業内で「サブカル」をテーマとした教材開発を行った記録が残されており、非常に興味深いものとなっている。

そして、様々な授業提案を実践した際の児童生徒の反応なども気になるところではある。本書で紹介されている授業提案がまだ実践されたことがないのであれば、ぜひ提案者に実践をしていただきたいところであるし、逆にもし既に実践された授業提案であるならば、ぜひワークの結果がどのようなものになったのかを知りたかった。

いずれにしても、これだけの数の授業提案がなされていることは大変貴重である。今後、ますます多様なメディアの活用が進められていくと思われるが、サブカル国語教育学のいっそうの発展を期待したい。

（評者：木村 康彦）